
ARMS MAKER'S 刃の姫

mick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARMS MAKER'S 刃の姫

【Nコード】

N7056Z

【作者名】

mick

【あらすじ】

「最強たるは誰なりしや？」剣術大会で万年二位と誹られ、武器殺しとありがたくない異名を冠するヒロインライナードは、ある日ソード・メイカーを名乗る不思議な少女に出会う。その日を境に平和な街では不可解な事件が起き始める。警備師団の団長であるヒロインは、わけもわからず事件に巻き込まれていくが……。

プロローグ（前書き）

メリークリスマス企画。

クリスマスに何かできればなあと思い、小説をUPしました。

ダークファンタジーなので、クリスマスらしさはちつともございませんが、

読んでいただけると幸いです。

24日中に、1章全話投稿の予定となっております。

戦闘シーンなど、刺激が強い描写が含まれますので苦手な方はおひかえください。

プロローグ

> i 3 5 0 0 6 | 9 6 5 ^

玉座すわに坐りし王は、疲れたようにつぶやいた。
うつろな目で、ひれ伏す己の血を引く子供らを見つめる。

最強たるは誰なりしや？

いざや始めん、終焉しゆえんの宴を……。
坐すわれる玉座はただ一つ、頂たる王冠もただ一つ。

己の武器を手にとりて、争えや争え。

我が選えらびしはただ一人。

世界の王はただ一人。

最後に大地に立ちし者、その者に我は全てを与えん。

王はそれ以上は何も語らず、玉座から立ち上がり去った。

王の子らも己が武器を手に取り、その場を去った。

それはもう、はるか昔の出来事……。

武器殺しと不思議な少女

剣戟^{けんげき}が響く。

一撃、二撃、三撃……。

怒号のような歓声が上がっているが、まるでどこか遠い世界のようだった。

俺の周りでは世界が静かに流れている。

再び剣が交わり、俺は刃へと目を走らせた。あと何撃持つだろうか？

こぼれた刃は、今にも亀裂^{きれつ}を走らせそうだった。

せめて数撃持てばと思っただが、そう都合良く事が運ぶはずもない。

嫌な音を立てて剣が砕^{くだ}ける。

「……………」

まずいと思ったときには、試合相手の刃がのど元に突きつけられていた。

「勝者つ、カルザス!! マツケローニっ!」

わああつと今日一番の大歓声があがった。勝利を祝う紙吹雪が舞い、カルザスは拳を振り上げ、観客に応えた。

ああ、またなのかと俺はがくりと地面に膝^{ひざ}をつく。

急に俺の耳に、周囲の騒音が戻ってきた。

万年2位のヒイロライナードはまたも記録更新と嘲笑^{ちやう}が聞こえる。大穴で俺に賭けていた観客からは、罵倒^{ばとう}が飛び出す。

俺は思わず叫びそうになったが、ぐつと唇をかねで耐^たえた。

負けたのは事実で、言い訳など口にするのはみっともない。

目を伏せ、未消化のまままで終わった熱を、ため息として吐き出し、折れた剣を拾い上げ、俺は黙って試合会場をあとにした……。

荘厳な石造りの門を出たところで、俺は陰鬱な表情で空を見上げる。

青々とした空と裏腹に、俺の気分は曇天模様。

そんな俺の背に、からから笑いながら年の寄った守衛が声をかけてきた。

「まあ、そう落ち込むなよヒイロ。勝負は時の運と言っじゃないか」「なら、俺はよほど運から見放されてるのだろうな」

今日の公式剣術試合で100連敗だ。

剣の道で生きると決め、街の警備師団へと就職し、時間を作っては剣術試合に挑戦し続けているのだが、結果はことごとくも優勝を逃し続けている。

「せめて、もうちつと良い剣を買って出場できんのかな?」

「それができるなら……とっくにそうしている」

ギロリと睨む俺に、守衛は口をつぐんだ。

守衛に八つ当たりしたところなどするものではないと、俺はぼつが悪く感じて、首を横に振った。

折れた剣を見つめる。この修理費をどう捻出すればいいのかが目

下の問題だろう。

生来実家が貧しいせいもあるが、不景気な世の中というか俺の羽振りぶはそう良くない。

今回の試合とて、優勝賞金目当てという、なんとも俗ぞくっぽい理由で出たというのが現実だ。

「達人は獲物えものなど選ばない。負けたのは俺が弱いからだ。俺の腕が良いならば、剣は折れたりなどせず、相手の元につきつけられていたはずなんだ」

ざあっと強い風が俺の黒髪をなぶった。

とぼとぼと、今日の戦いを思い出しつつ市街へ向かう足取りは重い。

決勝戦の相手が強いとは、それほどは感じなかった。

動きは全て読めていたし、剣が折れるまでは事実俺が追いつめていたのだから。

万年二位の他に、俺にはもう一つのあだ名がある。

武器殺しのヒイロ……。

俺が試合に負けている最たる理由。

剣の撃ち合いで負けたのではなく、いつも先に武器が壊れて負けているのだ。

先ほどの守衛だんちやうが言ったように、安物ではなくもつと質の良い剣を使えばと思い、断腸だんちやうの思いで出費したこともあったのだが……。

結果はいつもと変わらない。

「やはり俺の腕が悪いからなのだろうな」

そう結論づけたときだった。
くすくすつと笑い声が頭上から響く。

「解ってないのですね、その貴方。達人は獲物えものを選ばない？」
冗談でしょう。そこそこ腕が立つ程度の半端者だからこそ、選ばずとも良いのです。真に腕が立つ剣士とは、それこそ精密なほどに武器を選ぶ必要があるのです」

ふいにかけられた言葉に俺は驚く。

随分と高慢な物言いだが、聞こえる声はあどけなかった。がさがさと木の枝が揺れ、くるりと枝を掴んで一回転し、しゅたつと少女が地面に軽やかに着地する。

少女は栗色の長い髪を黒いリボンでとめており、上等の紅色のドレスをまとっている。

このあたりでは見ない子供だった。

少女はドレスの裾をちょこんとつまみ、深々と俺に向かって一礼する。醸かもし出す雰ふん囲い気きで、どこその貴族の子供なのだろうと俺は苦い顔をした。

「先ほどの試合を見ていました。ほんつとつに無様な試合でしたね」

出会い頭に失礼極まりない言葉だった。

少女はまるで楽しむかのように、猫のようなエメラルドの瞳を細める。

「それはどうも。貴族に対し非礼だとは思いますが、俺はそんなに暇じゃないのでな」

少女を無視し、俺はすたすたと横を通り過ぎた。こういつのに関わるよろくな事がない。

去っていく俺を少女は慌てて追いかけて、小走りで付いてくる。

「待つのです！ 人の話はきちんと最後まで聞きなさい。この唐変木っ」

「きちんと聞いて欲しいならば、貴族と言えど言葉には気をつけられよ」

眉をつり上げ憤慨する少女に、俺は立ち止まって真面目な顔で説教をたれた。

どうにも貴族の子供というものはしつけが悪い。

たまに剣術の指南を依頼され、貴族の家に出向くこともあったが、そのたびに嫌な思い出しが積み上がらない。

実践向きではなく、教養のための剣術の指南。

ちよつと厳しく指導すれば泣き言を言い出し、わざと負けてやらねば機嫌をそこねる。

依頼料だけは破格のため、生活のためと我慢はするが、それ以外で貴族に関わり合いになりたいと俺は思わなかった。

少女はむつとしていたが、俺の言葉に思うことがあったのだろう。こほんと咳払いして、お腹の前で指を組む。

「た、確かに貴方の言うことにも一理あるかも……です。名前も名乗らずでは話にならないでしょうから」

いや、別に名前を聞きたいわけではなく、俺はかまってほしくないだけなのだ。

その一方的な態度こそ問題にすべきなのだと思ったが、それはあえて指摘はやめておいた。

相手はまだ子供なのだ。同レベルで張り合ってどうする？

俺がしぶしぶ少女に向き直ると、少女は満足げに微笑んだ。

「私の名前はメディア。メディア＝クラインヴェル」

「俺はヒイロ。ヒイロ＝ライナードだ。この街で警備師団の団長をしている」

「知っているのです。武器殺しのヒイロ、飛ばず泣かすのヒイロ……なんともけつたいな異名は有名なのです」

「……………」

ここは一発教育的指導で、この少女……メディアの頭を小突いても良いだろうか？ と俺は思った。

飛ばず泣かすのヒイロ。勝手に変な異名を増やすなど言いたい。

むすつと黙り込む俺を無視して、メディアは腰に手を当て、えへんと胸を張って話を続ける。

「始まりの武器精律術師の直系、クラインヴェル家に生まれた私は、稀代のソード・メイカーなのです」

「武器精律術……ソード・メイカーだと？」

唐突に意味不明な単語を持ち出され、俺は眉を吊り上げた。

やけに偉そうなメディアの態度に辟易へきえきしてるせいもあったが。

だから、俺は胡乱うっろんな目をメディアに向ける。

これは一体何の「子供のごっこ遊び」なのかと……………。

「ほう、それでそのソード・メイカーとやらが、一体この俺に何のようなんだ？」

「私が貴方を勝たせてやるのです」

自信満々にメディアが言い切ったので、俺は不快に感じて目を伏ふせた。

勝たせてやるだと？ ずいぶん恩着せがましい言葉だ。

たまたま試合で見かけた俺に、高価な剣でもほどこしてやるうと
いうところか？

馬鹿馬鹿しいと俺は吐き捨てる。

メディアは憤った俺におどろいたのか、目を丸くした。

「俺はほどこしなど受けん。妙なあだ名のついた気の毒な剣士の噂
を聞きつけ、パトロンにでもなって、話のネタにでもしたかったの
か？ 暇つぶしならよそでやれ」

「え？ あっ……違っ……いや、違わないのかも
？」

メディアは慌てて否定しようとしたが、次の瞬間、神妙な顔をし
てぼそりと呟く。

その姿に、やはりかと俺の中に失望が広がった。

嘘をつかずに本音がぼろりとこぼれるところが、子供らしいと言
えば子供らしい。

まあ、当初から期待などというものを、かけらももっていないかつ
たのだから、これは失望と言うよりも呆れと言うのが正解だろう。
悪意からの言葉ではなく、子供のただの浅慮だ。いちいち相手に
して目くじらたてる必要もない。

付き合いきれないと、俺はメディアに背を向けた。

「何処に行くのです？ まだ話は終わってないのですよっ」

足早に去っていくこうとする俺に、メディアは追いつがる。

これ以上何を話すというのだろうか？

きゅっと言う悲鳴と、どしゅっと思いで背後で何かが倒れる音がし、俺
が振り向けばメディアが地面へと伏していた。

ひらひらしたドレスなど着て走ろうとするから、足下が見えずに

転ぶのだ。

うつと痛みでうめき、涙を浮かべるメディアと視線が合う。

俺は助け起こそうと手を差しのばしかけてやめた。

いつもなら手を貸すところだが、これ以上つきまとわれるのは「めんどった」。

手を引っ込めると、恨みがましそうにメディアがおれを見上げる。

「待ちなさい！ ヒイロっ、私は貴方に大切な話がありますっ」

話など聞きたくない。

話を聞いてやれるほどの余裕など、試合に負けて気が立っている今の俺にはなかった。

「待てと言っているのに、この唐とうへん変木ぼくっ！ レディーが困こっているのに、見捨てていくのが男のすることなのですかっ？ ヒイロっ戻ってくるのですっ。今なら数々の非礼は寛かん大な処置だいで許してやるのですっ。ヒイロっ、ヒイロっライナアアアドオオオっ……」

とても許してくれるような絶叫ではない。むしろ呪い殺されそうだった。

俺のことを見知っている通行人からの、何事かと驚いたような視線が痛い。

俺はメディアの罵声から逃げるため、さらに歩調をはやめる。

貴族のお遊びに付き合える余裕がある奴に、話を持って行ってくれと、俺は気まずい思いをしつつも、メディアの静止を無視して帰宅を急いだのだった。

最強たるは誰なりしや？

警備師団、それは街の治安を維持する組織だ。

どの街にも必ず一つは存在し、主に犯罪者の取り締まり、けんかの仲裁、役所と協力しての捜査、催し物の警護など、仕事内容は多岐にわたる。つまるところ、何でも屋という意味合いに近い。

俺が所属する街の警備師団はの名称は、紅蓮の獅子12師団と言

う。

いささか大仰すぎる師団名だと俺は思う。なぜなら……。

「平和つすねえ……。」

湯気の立つマグカップをゆらしながら、同僚であるデイルが机の上に伸びていた。

目を細めて幸せそうに、春に陽気にまどろむその姿はまるで……

「紅蓮の獅子と言つより、黄色の猫だろう」

俺はぶるぶると怒りに震えつつ、師団の備品である剣を磨く手を止めた。

がたりと席から立ち上がり、デイルを怒鳴りつける。

「たるんでいるぞっ！ 警備師団たるもの、いついかなる時にも戦場へ赴けるよう、常日頃から気を引き締めてっ」

「そう言われても、ヒイロ団長。大陸5カ国中、我がソーディアス国は最も平和な国だと言われているんっすよ？ ここ数十年、地方の小競り合いはあっても、戦という戦もなく、剣の国と謳われた建国の当時の影もなく、武芸に関しては衰退の一途をたどるばかりじゃ

ないっすか」

むくりと顔をあげて、口をへの字に曲げるデイルに、俺はうぐつとつまつた。

俺が住まうここ……ソーディアス国は、かつては剣の国と言われるほど、優秀な剣士が切磋琢磨せつさたくまするお国柄だった。

それも建国の王であるソーディアス1世が、稀代の剣士であったことに由来する。

窓から外を見れば、ポールにへろんと絡みつく国旗が見えた。

そこには剣をかたどった威めしい文様が刻まれているのだが……

今のソーディアス国を象徴するならば、文様を羽ペンにでも変えた方が良い。

「それに、俺たちが警備する12区は都市といえど、辺境ですからね。俺がここに就職して出勤したのって、酔っぱらいのけんかと、夫婦仲違いの仲裁だけ。気を引き締めろって言われても、これじゃあねえって思ってしまうっす」

街の人から穀潰しやくつぶしと言われ、配属されているのは俺とデイルを含めてたつた10人。

デイルの言葉に俺は何とも言えない顔をした。

師団をまとめる団長として表面上はともかく、心の中では激しく同意したい。

重いため息をついて、俺が再び椅子いすに腰をおろすとくすくすと笑う声が出た。

「笑い事ではないだろう、アーヴィン」

「いや、すいません。団長……団長の顔がおかしくって」

アーヴィンは薄い色の金髪を揺らして笑い続けた。
俺はむっとして顔を朱に染める。

さとい奴だから、俺が胸中で何を想像したのか表情で察したのだらう。

それほど表情に感情が出ているのだろうか？ と俺は壁の鏡を見て自分の頬をさすった。

アーヴィンはようやく笑いがおさまったのか、息を整えて窓を開け放つ。

外では子供達が元気に走り回り、アーヴィンの姿を見つけて手を振った。

「いいじゃないですが、団長。平和に越こしたことはないですよ」

優しげに子供達を見つめて、アーヴィンは手を振り返す。

幸せそうなその姿に、それもそうかもなと俺は相づちを打った。
アーヴィンは去年の暮れに結婚し、今は身重の妻を抱えている。

騒動など起きなければ良いと思うのは、当然なことだ。

俺の考えこそ、時代錯誤じだいさくごと言われてもそれは仕方ないのかもしれない。

落ち込む俺に、アーヴィンは悪戯いたずらめいた表情を浮かべる。

「団長も早く嫁を貰ったらいじゃないですか」

「……それは嫌みか？ アーヴィンよ」

雉きも鳴かずばうたれまいとはよく言ったものだと思っ。

俺は立ち上がって、アーヴィンの首をがしりとホールドした。アーヴィンはうげっとカエルのような声を出す。

「団長は、人が良すぎるんですよ。他の男に譲ゆずってばかりで」

アーヴィンはそう言うが、譲った覚えは一切無かった。
気がついたときには、いつも余所の男のものになっていただけで、さすがに他人のものになった女に、横恋慕するつもりはない。いや、横恋慕するほど自分のものにしたと思うような女に、いまだかつて会ったことがないだけの話なのだが。デイルが言うには俺は鈍いらしい。
仕事もなく俺たちがふざけあっていると、とんとんとドアが叩かれた。

どうやら珍しく、来客がやってきたらしい。

「はいはい、ちょっと待ってくださいよ」

警備師団の剣士とは思えないような返事をあげ、デイルがいそいそとドアへと向かう。

よほど暇をもてあましていたのだろう。

嬉々として出向いたデイルは、ドアを開けて外に出る。

どうせまた、くだらないけんかの仲裁か何かなのだろう。

デイル一人に任せておけばいいと、俺は再び剣を磨く作業に戻るうとした。

しかし………。

「だ〜んちよ。ヒイロ団長」

「なんだ、デイル。何か大事か？」

外に出たデイルが、俺を呼びに戻ってきた。

ひよつとしたら、大人数での乱闘騒ぎか何かなのだろうか？ それにしては緊張感のかけらもないデイルの声に、俺はいぶかしげな顔をする。

「大事と言えば、大事かも。なんと、団長にお客さんっす」

「客？ 俺にか？」

「ええ、それはもう、とびっきりの美女っすよ」

含み笑うデイルに、俺はなんとなく嫌な予感がした。

そもそも俺の近い知り合いに、美女など存在しない。

一体誰だ？ と俺が外に出ると、平行な目線の先には誰も存在しなかった。

視線をゆつくりと下へと移動させ、確認した姿に俺はこめかみを押さえる。

「よくも昨日は無視して置き去りにしてくれましたね、この唐変木」

昨日出会った、貴族の少女がそこにいた。

「ここは託児所ではないと俺は思う。」

「だといつのに、こいつらは……と、俺は苛々としながら剣を磨く。」

「へえ、お名前はメディアちゃんって言うんすね」

「子供扱いしないで欲しいのです。私の事はレディー・メディアと呼ぶがいいかと……」

「はい、メディアちゃん。紅茶ここに置いておくね」

「だからっ、子供扱いするではないと言っているのですっ」

怒りつつもアーヴィンから受け取った紅茶に、メディアは砂糖を2杯とミルクをたっぷり。

その光景にどう見ても子供だろうと思いつつも、3人は突っ込みはしなかった。

メディアはこくりと紅茶を一口含むと、眉をしかめた。

「安物なのですね。香りもなにもしないではないですか」

まずいとメディアは文句もんくをたれる。

ミルクをあれだけ入れておいて、香りもへったくれもあるはずがないというのに。

俺が目を据すわらせて立ち上がると、アーヴィンがぎょっとしてすっ飛んできた。

俺の身体を拘束し、アーヴィンは必死で訴える。

「団長、お、落ち着いてください。相手は子供です」

「放さんか、アーヴィンっ！ 子供だからこそ、今のうちにしつけというものをだな」

「団長のはしつけのレベルを超えていますっ。前も貴族のお坊ちゃんを稽古けいこだからと笑顔で叩きのめして、謝礼金をもらい損そとねたのを忘れたんですかっ」

アーヴィンの言葉に、俺は冷や水をあびせかけられたように硬直こうちくする。

意にそわぬ仕事に従事したというのに、謝礼金はもらえずじまいと、思い出したくもない過去が脳裏にかけめぐった。

そうだったなど、俺はがくりと脱力して床に手をつく。

「ふうん………そっかあ。メディアちゃんはクラインヴェル

家のお姫様で、ソード・メイカーってのなんつすねえ。ところで、ソード・メイカーってのは一体何？ 最近貴族の子供達の間で流行はやってるごっこ遊びか何かっすか？ うん？」

「違うのですっ！ なんですか、ごっこ遊びとは。ソード・メイカーを馬鹿にしているのですかっ？」

意外と子供好きなのか、デイルはマイペースにメディアの相手をしている。

メディアは、デイルの雲を掴むような態度に不満をあらわにしていたが、やがてあきらめたように嘆息たんそくした。

「仕方ないのです。ソード・メイカーは建国にまつわる歴史の裏舞台。史書にも登場してこないのですから、下々の者達が知るよしもないのです」

「ほう、それはまた壮大そつたいな設定っすね」

俺はよくもまあ、こんな作り話に付き合えるものだと思いに感心した。

もともとゴシップやら、とんでも話が好きな奴だから、メディアの話は退屈しのぎにちょうど良かったのだろう。

続きはと、興味津々に尋ねるデイル……。

俺は馬鹿馬鹿しくなって、奥の鍛錬場に引っこ込もうとした。そんな俺に、待ちなさいとメディアは慌てたように席を立ちあがった。

「最強なるは誰なりしやっ？」

メディアの発した言葉に、俺は足をぴたりと止める。

振り向く俺に向かって、メディアはくすりと笑った。

「最強なるは誰なりしや？ 選ばれし者に王位を与えん……」

もともと、この5大国がまだ1つの国だったときに、ときの賢王アルマキアスが5人の子供らに言ったと伝えられる言葉です。それぐらいは知っているでしょう?」

「知らないわけないだろう。この5大国に住む者なら子供から大人まで知っている話だ」

俺は口をへの字に曲げる。

今は昔、賢王アルマキアスには5人の子供がおり、その5人の子供達は武芸に秀で、各々得意とする武器があった。

槍、弓、槌、銃……そして剣。

己の最も得意とする武器で戦い、勝ったものに王位を与える。

その言葉のもと、王の子らは武器を手に王位をめぐって熾烈な抗争をくり広げた。

結局、王は勝者を見届けることもなく、王位を与える前に没してしまい、国は5つに分裂してしまったのだが……。

それがこの5大国の始まりであるというのは、誰もが教養的に知っていることである。

「それで、その昔話がなんだというんだ?」

「この5人の王の子の話……勝者は決まらずとも、最強の武器は一体何だったのかという話です」

ふふんつと笑うメディアに、俺は素っ気なく返した。

「なんでもいいんじゃないか?」

「なあっ……」

俺の言葉にメディアは絶句した。

どの武器にだって一長一短はある。最終的には使い手の力量で決

まるのだから、武器の種類で善し悪しを決めても仕方がないだろうと、俺が呆れたように言えば、メディアはダンっと机を叩いて立ち上がり激昂した。

「何を言っているのですっ。あ、あ、貴方はそれでも、剣の国であるソーディアスに属する剣士なのですかっ！なんたる体たらく」

恥を知らなさいと指を突きつけるメディア。

俺はやかましいと顔をしかめつつ、メディアの首根っこを掴みあげた。

猫の子よろしくぶらんと宙に浮いたメディアは、じたじたともがく。

「何をするのですっ。レディーに向かつて失礼なっ」

「ここは師団の詰め所であって、子供が遊びにきて良い場所ではない」

用がないならさっさと帰れと、俺はメディアを外へ放り出そうとした。

話の続きが聞きたいデイルは不満そうな顔をしたが、勤務中に子供の与太話に付き合っていていいわけではない。規律は守るべきものなのだ。

子供は子供同士で遊べと俺はドアを開けると、突然飛び込んできた来訪者にどんつとぶつかる。

息せき切って飛び込んできたのは、役所の下っ端の人間のようなった。

本当に今日は珍しく来訪者が多い。

俺は驚いて、メディアをどすんつと床の上に落としてしまった。

きゃんつとか細い悲鳴を上げて、メディアは目をつり上げて俺を睨んでいたが、それにかまっている場合ではないようだ。

役所の者は真っ青な顔で、かちかちと歯を鳴らしている。

ただらなぬ雰囲気に、俺がちらりとアーヴィンに視線を送れば、アーヴィンは水を入れたコップをへたり込んだ役所の者に差し出すが、それを受け取る余裕すらないらしい。

「どうした？ 一体何があった」

「し、しょう……て……街の、ろ、路地につ……し、っし……」

膝について俺が問いかければ、辛うじて商店街の路地とだけ聞き取れた。

俺がデイル、アーヴィンと呼べば二人はすかさず武器を手にとって部屋を飛び出していく。

メディアはおろおろと右往左往し叫んだ。

「こら、まだ話は終わってないのです。私を放って何処に行くのですかっ」

「それどころではない」

「ああ、悪いっすねメディアちゃん。お話の続きは、また今度と言うことで」

「気をつけて家に帰るんだよ」

いきなり取り残されて、メディアは立ちつくす。

メディアが我に返って叫ぶ声が背後で響いていたが、それどころではない。

呼び止める声を見殺して商店街の方へと俺たちは疾走する。

いつもと何が違う？ と言われると説明しにくい、あきらかに街の空気は豹変し、不穏な空気が蔓延し始めていた。

事件を聞きつけたのだろう。

すれ違う街の人々の表情は、不安げに曇り、ざわざわと声を潜めて話をしている。

そんな状況に、俺の中で得^{えたい}体の知れないような、嫌な予感が広がった……。

不穏と平和

役所の者が言っていた場所は、師団の詰め所から遠くない場所だった。

まばらな人影が、商店街に近づくにつれて多くなり、不穏な空気にざわめいていた。

俺たちが人混みをかき分け現場に到着すると、先に到着していた役所の者達が立ち入り禁止のロープを張り巡らせている。

俺たちはそのロープをかいくぐって、路地の奥へと足を踏み入れた。

「………つ。なんつすか？これ」

ぶうんつと黒い羽虫が飛んでいる。

地面にはシートをかぶせられた物体。

広がった黒い染みは、変色した血なのだろう。

春の陽気のせいか、すさまじい腐敗臭が周辺に立ちこめている。

もともと、平和ぼけしてこういう事件になれていない役所の人間達は、路地のすみの方で嘔吐えつしていた。

俺たちもこういう現場になれているわけではない。必死でのど元にこみ上げる吐き気をなんとか飲み込み、俺はどす黒く血で汚れたシートをめくりあげ、中身の惨状じやうたいに思わずうめく。

「ひどい………」

「そうだな………」

「人間のすることじゃないっすよっ」

耐えかねてアーヴィンが口元を押さえて視線を外した。

デイルはあまりの惨状に、真っ青になって口をわななかせている。それも仕方がない。シートの中に転がった死体は尋常ではなかったのだ。

胴体は真っ二つに切断され、切断面から内臓がはみ出ており、両手両足、そして首と全てがすっぱりと切断されている。

目を見開いて絶命している表情に、俺は見覚えがあった。

「カルザス…マツケローニ……先日の公式試合の優勝者か」「まじっすか！」

デイルが驚いた声を上げる。

かりにも公式剣術試合の優勝者が、こんな風に惨殺されようとは信じがたい現実だ。

俺は遺体の周辺に墜ちている不自然な金属を拾い上げる。

「これは、もとは剣だったのか？」

俺は金属を拾い集め、地面に並べていく。

断面は非常になめらかで、輪切り場にされた金属を並べれば確かに剣の形となった。

一体何をどうすれば、剣がこのような状態になるというのか。

俺のように剣戟の末で折れたのなら、とてもこんな断面になったりはしない。

こんな、まるでチーズでもカットしたかのように……。

そんな時、俺の心の中を見透かしたように、疑問に対する答えが返ってくる。

「それは、剣で切り飛ばされたのです」

聞こえた声に、俺は思わずこめかみを押さえた。

デイルとアーヴィンがぎよつとして後ろを振り、慌てて声の主の前に立ちはだかる。

「ちよつ、メディアちゃん。追いかけて来たんすか？ 入って来ちゃ駄目つすよつ」

「子供が来て良いところじゃない。早く出て行くんだ」

さすがに咎めるような口調の二人に、メディアはふんつと鼻を鳴らす。

無理矢理にでも追い出そうと手を伸ばす二人の腕をかいくぐり、メディアは死体側まで近寄る。死体をじつと見下ろしているその表情は、妙に冷めていて、取り乱した様子は微塵もない。

俺はそんなメディアを怪訝に思った。

普通女の子ならば、悲鳴を上げてへたりこみ、下手をしたら気を失ってもおかしくない状況だというのに、メディアはまるでぶつ切りにされた遺体を観察でもするかのような風体だ。メディアは一通り検分が終わったのか、眉をひそめて呟く。

「……やはり、これは墮とし者」

「落とし物がなんだと？」

俺の不機嫌な問いに、メディアは視線だけ返した。

またつまらない子供のごっこ遊びの謎かけか何かなのだろうか？ そうならば不謹慎きわまりないことだと、俺は気分が悪くなった。人が一人死んだというのに……。

俺は耐えかねて、メディアを追い出そうと腕をつかみ上げる。

「何をするのです？ この野蛮人っ」

「唐変木から野蛮人になっちゃったか。子供はこんな所にいるべきじゃない。さっさと家に帰って子供は子供同士で遊べばいい。興味本位

でこんなことに首を突っ込むな」

「興味本位で首を突っ込んで、痛い目見るのはあなたたちの方なのですっ」

「はいはい、メディアちゃん。これ以上はお口をチャックしようっす。うちの団長は意外と気が短いから。お兄さんがお家まで送ってあげるっすよ」

デイルがメディアの口を押さえ、抱き上げて俺から引き離す。

そのことに俺はほっとした。子供に手をあげるつもりはないが、あれ以上メディアが言葉を続けていたならば、胸ぐらをつかみ上げて恫喝どっかっしていたかも知れない。

我ながら大人げないなと思いつつも、俺は死体の見聞へと戻る。

「放せっ、放すのですっ！ どうして、どいつもこいつも、私の話をきちんと聞こうとしないのですかっ？ このままだと、大変なことになるのですっ」

「お兄ちゃん達は今忙しいっすからね。おとぎ話はまた暇なときにゆっくり聞いてあげるっすから、今日は大人しく帰るっすよ」

「おとぎ話じゃないのですっ！ やっぱり私の事を子供だからって馬鹿にしてええ」

デイルに連れられて、遠ざかるメディアの声……。

このままだと大変なことになる。

まるで予言めいたその言葉は、真実そうなってしまっことに、俺はこの時はまだ想像もできなかったのだった。

滅多に事件が起こったことがない12区での猟奇殺人……。

慣れない対応に四苦八苦し、気がつけば師団員達の疲労は限界まで来ていた。

アーヴィンに進言され、交代制で休みを取ることになったのだが、それには俺も含まれていたらしい。

休んでくださいと師団員一同から心配されてしまい、俺は1日だけ現場を離れることとなった。

久しぶりに自宅のベットへ戻り、俺は夢さえ見ず泥のように眠った。

小鳥のさえずる声と、窓から差し込む光に意識は無理矢理浮上させられる。

うつすら目を開け、朝かと重い身体をおきあがらせたところで俺は固まった。

「……………どうして、お前がここにいる？」

なにやら家捜しでもするかのように、俺の部屋を探るメディアがいた。

不法侵入だろうと俺が胡乱な目を向ければ、メディアはふんつと胸を張った。

「ちゃんと、許可はとったのです」

「誰にだ？」

「デイルに住所を聞いてここまでやってきたのです。きちんと玄関からはいったのです。そこで出会ったユーリー姉様に許可をもらったのです」

「デイル、ユーリー……………」

俺は顔を手で押さえてため息をついた。

ユーリイというのは、俺の年の離れた妹だ。

気立ても良くてしつかり者。それなのに、何故こんな得体の知れない少女を俺の部屋にずかずかあがらせるのか。

しかも、デイルよ。お前俺に休めと言ったくせに、こんな爆弾を押しつけてどうする？

後で覚えていろよと拳を握りつつ、俺は説明をもとめるために1階へと降りた。

「あら、おそようございます。お兄ちゃん」

「……………おはようございますだ」

口の端をつり上げ、俺はユーリイに挨拶を返す。

そんな俺に、ユーリイは吹き出した。

「あれは一体何のつもりだ？ ユーリイ」

「だって、お兄ちゃん。お兄ちゃんにあんな可愛い彼女ができたなんて、私知らなかったんだもの。私は貴方のお兄様のおパートナーですなんて、出会い頭に説明されちゃったら、これはもう妹としては応援しなきゃって」

「せんでいいっ！ 全く何を考えているんだ」

俺とメディア、一体いくつ年が離れていると思っているのか。

けっして幼女趣味などではないからなと、俺は憚然としてダイニングにある椅子に腰掛ける。いつまでもお腹を抱えて笑い続けるユーリイに、俺は勝手に妄想してると吐き捨てた。

一度ツボに入るとなかなか抜け出せないらしい。

そんなこんなで、朝一番のくだらないやりとりをユーリイとして

いると、上の階から、とてとてと軽い足音を立ててメディアが降りてくる。

「あら、メディアちゃん。調査は終わったの？」

「なんのことだ？」

俺がいぶかしげな顔をしていると、メディアはさも当然そうに言う。

「自分のパートナーの、素行調査ぐらいはしておきたいものなのです」

「ほう……そんな一方的な説明で、俺の部屋を勝手に荒らしていた正当性でも主張するつもりかお前は」

「それで、それで？　メディアちゃん。何か不審なものの一つでも見つかった？」

興味津々とばかりに目を輝かせるユーリイに、ふうっと頬に手を当てメディアはため息をついた。

「それが全然なのです。お母様は年ごろの殿方の部屋には、色々女性に見られたくないものがいっぱいあるのよ。相手の趣味を知りたいなら、ベットの下とかタンスの裏とかをチェックしなさいと仰っていたのに。無くて良かったと思う反面、期待はずれもいいところなのです」

「ええ〜つまらない。真面目すぎてつまらない。何も意外性がなくてつまらないよ、お兄ちゃん」

俺はがたりと椅子からずり落ちそうになる。

こんな年端もいかない少女に、一体何を教えているんだ？　と俺は呆れてため息をついた。

「いったい、どういう母親なのだろうか。」

「ユーリイと言えば、メディアの答えに指をくわえて、しきりにつまらないと呟つぶやいている。」

「なにを期待していたんだ……ユーリイ？」

「まあ、それはさておき朝ご飯にしましょう。メディアちゃんも食べ歩いてくわよね？」

「ここにこと皿を並べるユーリイに、メディアはもじもじしつつこ頷く。」

部屋には香ばしい朝食の香りがたちこめていた。ぐうつとなるお腹の音に、今のは自分ではないと釈明やぐめいするメディア。俺はその子供らしい仕草に、しかたないなと苦笑いした。

メディアはふんつとそっぽを向きつつ、椅子いすの前に立つ。

「ヒイロ、椅子いすを引いて欲しいのです」

「……はいはい、お姫様」

「こついつところは本当に貴族らしい。俺は席を立って椅子を引いてやる。」

メディアは満足そうに頬ほほを緩め、席に座った。ユーリイ特性のパンケーキには生クリームとジャムが添そえられており、メディアは目を輝かせてフォークとナイフを手を取った。

紅茶の件でわかっていたことだが、メディアはかなりの甘党のようだ。

「……太るぞ」

ぼそりと呟いた俺に、メディアとユーリイが鬼のような形相で睨んできた。

「デリカシーがないなんて、最低よね」

「全くなのです。女性に体重の話をふるなど、万死に値するのです」

一般論を述べただけなのに、何故ここまで怒られなければならないのか。

理不尽だと思いつつ、俺はブラックコーヒーをすすりながら新聞に目を通す。

そこには、殺人鬼いまだに捕らえられずの文字が大きく載せられていた。苦いコーヒーがさらに苦みを増したような気がした。

そんな俺の心情を余所に、メディアとユーリーの楽しげな会話が続く。

「それで、メディアちゃんは今日この後どうするの？」

「この後？ この後は……」

むぐむぐとパンケーキを咀嚼し、メディアは紅茶を飲んで人心地つくと、とんでもないことを言い出した。

「今日はヒロにエスコートしてもらって、街を散策さんさくするのです」

「デート、デートなのねっ」

興奮気味に叫ぶユーリーに、俺は思わずむせてコーヒーを吹き出した。

汚いと氷のような二人の視線が突き刺さったが、それどころではない。

俺はフキンで机をふいた後、メディアに苦々しげに言った。

「俺はそんなことを了承した覚えはない」

「アーヴィンが了承したのです」

ぐつと親指をつきたてるメディアに、俺は馬鹿なと驚愕きょうごうした。

「何故だアーヴィンっ！ お前だけは俺の味方だと信じていたのにあの裏切り者め……デイル同様俺に休めと言っておきながら、これ如何いかに？ ひよつとして、俺はアーヴィンに本当は嫌われているんだらうか……」

ユーリイはへこむ俺の背をばしりと叩く。

「いいじゃない。どうせ、家でゴロゴロしてるだけなんでしょう？ いったも休みは鍛錬たんれんだとか、剣術の試合ばっかなんだから、たまには街に出て遊んでおいでよ、お兄ちゃん。あ、メディアちゃんはその前に……」

「なんなのですか？」

きよとんとするメディアに、ユーリイの口元はにやりと半月状に弧こを描く。

デートならばおめかししないとねと……。

ああ、またユーリイの悪い暴走が始まったのだと俺はうなだれた。

不釣り合いな武器

「完璧だわ……さすが私。グッジョブ」

渾身の出来と言わんばかりに、ふうつと息を吐いて額の汗をぬぐうユーリイ。

メディアは自分の格好をしげしげとももの珍しげに見つめていた。

「下々の者はこういう格好をするものなのです？」

「いや、違うだろ」

俺は誤った知識を植え付けられてはたまらないと、すかさず訂正を入れた。

白いブラウスと水色のスカート。背には天使の羽がつけられている。

これは今12区で行われている春祭りのポピュラーな衣装の一つだ。ユーリイが子供の時に同じ格好をしていたのを覚えている。後生大事にその時の衣装を保管していたのだろう。

「やっぱり、髪は三つ編みに……いや、そうじゃないでしょうユーリイ。考えるのよ……二つに上げて上にアップして、でもでもこれだけ綺麗な長い髪なのよ？カラーで巻いてしまいたいいいい」

右往左往しつつ、ユーリイはメディアの髪型を決めかねているようだった。

今のポニーテールで俺は十分だと思う。

このままだと、夜中まで着せ替えごっこをし続けそうな勢いに辟

易し、俺は喚くユーリイを無視してメディアを連れて外に出た。

どうにも慣れない格好に戸惑っているのか、メディアは不安げに俺を見上げる。

「へ、変じゃないのです?」

「ああ、大丈夫だろ。ほら、そこらの子供お前と同じような格好をしているじゃないか」

「……………」

俺はそこらを駆け回っている子供達を指さした。

安心させようと思って言ったのに、どうにもメディアは俺の返答が気に入らなかつたのか、頬ほほをふくらませる。

「……………女の子がこついつ質問をしたら、言つべきことは他にあるのです」

「何か言つたか?」

「本当に気が利きかないと言つたのですつ。この唐とつへん変木ぼく」

べえつと舌を出して怒るメディアに、俺はやはり子供はよく解らんと思った。

俺を見知つた街の者からは、好奇こじの視線が突き刺さる。

さすがに隠し子か? とからかわれたときには、思わず顔を引きつらせてしまった。

確かに年齢より上に見られることは多いが、さすがにショックだ。一体俺がいくつの時の子だと、暴れたくなる。

きつとこういう光景を想像して、今頃ユーリィやデイル、アーヴインは薄ら笑いを浮かべているに違いない。本当にあとで覚えてい
るよ……………。

メディアは衆目の視線など、全く気にしていないのか優雅ゆうがに道を歩いている。

一歩あゆむごとに、栗色の長い髪と白い天使の羽がふわふわと動いた。

見た目は地元の子供と一緒にのだが、やはり垢あかぬ抜けていて田舎臭いなかい雰囲気は一切無かった。

近所の悪ガキ共が顔を赤らめ、しきりに声をかけると仲間同士小突き合っているのが見える。

見た目だけは可愛いからな……………。

勇気を出せ坊主共っ！ 遠慮なく俺の代わりをさせてやろう。だから、メディアと遊びたいならさっさと来い。そして俺を解放してくれ。

そんな俺の心を見透かしたかのごとく、メディアはむっにらと睨む。

「ヒイロ、何をよそ見をしているのです！ しっかりエスコートして欲しいのです」

「……………」

何故女というものは、時々超常能力並みの洞察力うたひりを發揮するのだろうか。

余計なことは考えまい。俺はもうあきらめた。

首輪をつけられ、散歩している犬とはこういう気分なんだろうか。いや、違うな。奴らは楽しそうだ。

俺は犬のように幸せそうに尻尾を振る元気もない。

久しぶりの休日だというのに、俺は重々しいため息をついた。

街の中心部に来ると、道の端々に市が並んでいる。遠方の民芸品やら珍しいお菓子、装飾品など、それらは街の人々を楽しませているようだ。

もちろん俺やメディアも例外ではなく、普段では見られない品々を興味深く見つめる。

そんな中、俺は一つの店に目をとめた。

「お、そこのがたいの良い兄ちゃん。どうだい？ 掘り出しもんだよ」

祭りのためにやってきた行商なのだろう。

木箱の上には上等のビロードの布が敷かれ、その上には大小様々な剣が並べられていた。

うぐつと俺は言葉に詰まる。視線が値札をいつたりきたり泳ぎ、ゼロの数を数える。

ひーふーみーよー……高い。

高いが、手が届かないわけでもない微妙な値段だった。

なんと迷う値段設定をするんだ行商人よ。

剣を新調しなければならなかったし、これは運命というものではないだろうか？ しかし、今月の家賃や食費を考えると、ユーリイが角をによつきり生やしそうでもある。

どうすれば？ と頭をかかえて葛藤する俺に、行商人は肩をすくめた。

「なんせこの剣なんて滅多に産出されないクロム鋼を織り交せてあ

るからね。ここで買っておかないと、間違いなく後悔しますぜ」
「……………な、なるほど」

ここまで言われては買うしかあるまい。
行商が指し示す銀色の剣に、俺は吸い寄せられるように手を伸ばした。

しかし……………。

「やめておくのです、ヒイロ」

ふんつと鼻を鳴らし、俺がのばしていた手をメディアはぺちつと叩いた。

はつと我に返って、俺はメディアを見下ろす。

俺は今まで、一体何を考えていたのだろう。危ないと冷や汗をぬぐう。

「ははっ、お嬢ちゃんには剣なんて興味がないかなあ。まあ、男じゃないと解らない世界つてもんが……………」

「武器を見る目に男も女も、子供も大人もないのです。物を知らない素人相手と侮ってもらっては困るのです」

メディアは憤った様子で、木箱の上の剣を手を取った。

「クロム鋼を織り交ぜてある？ 嘘なのです。本当にクロム鋼を混ぜて加工してあるならば、刀身は青灰色に輝くはず。こんな濃度の薄い銀色にはならないのです。しかも、なんなのですか？ この重心の狂いはっ。こんなも剣と呼ぶのもおこがまっ……………」

そこまでだと俺はメディアの口をふさいだ。

業者は口元をわななかせ、顔は真っ赤になっていた。

行商のプライドというものもあるだろう。俺はまだ何か文句を言いたげなメディアを抱えて、その店を後にした。

店からだいぶん離れ、中央にある噴水へたどり着くと、俺はメディアを解放する。

「ヒイロっ！ お前はどっちの味方なのです。あんな詐欺まがいの……」

「どちらの味方でもない。あいつはあいつで、商売で食っていかなければならんだ。安い物を高く売ろうとする、それは常套手段だ……」

「……暢気な話なのです」

騙される方が悪いんだと苦笑いする俺に、どこまでお人好しなんだとメディアは呆れたようだった。

歩き疲れたのか、ハンカチを敷き、噴水の縁に腰をかけたメディアに、俺は屋台で買ってきたリング飴を差し出す。先ほど朝食を食べたばかりだが、女は甘い物は別腹とよく言うしな。

……まあ、別腹と言いつつ同じ腹だから、やれ太ったのだと大騒ぎするんだろうが。

メディアは差し出されたリング飴をしげしげと見つめた後、それをひったくった。

「こんなもので懐柔しようと思っても、甘いのです」

「素直にありがとうと言え」

可愛くないなと言えば、メディアは頬を赤らめ余計なお世話だと眉をつり上げる。

リング飴をなめながら、メディアはふと俺に問いかけた。

「ヒイロは、あんな偽物ではなく、もっと良い剣が欲しいとは思わないのですか？」

「……………良い剣だと？」

探るような視線だった。

ああ、ひよっとして出会い頭の勝たせてやるとか、パトロンになつてやるとか、あの事だろうか？

まだ諦めていなかったのかと俺は胡乱な目を向ける。

「俺は、ほどこしは受けん」

「そうではなくて、ただ純粹に強い剣は欲しくないのか？ と聞いているのです。そうすれば、公式試合に勝つて賞金も手に入るし、名前も上がるのです。貴方は実と名声が欲しくないのです？」

「そうだな……………」

メディアの問いに俺はどうだろうと考え込んだ。

名声と実、剣士として生きる以上は欲しくないと言えば嘘になる。嘘にはなるのだが……………。

俺は目を伏せた後に、きっぱりとメディアに言い切った。

「いらんな」

「……………どうしてです？」

真剣な表情で答えを求めるメディアに、俺はため息をつく。

「確かに欲しくないと言えば嘘になるが。別に俺とユーリイが生きていけるほどの財なら、今のままで十分だし、悪い名声ではあるが「万年二位のヒイロ」やら「武器殺しのヒイロ」やら、そこそこは有名だしな。これ以上を望むのは分不相応というものだろう。俺は自分の大事な者を守るに足るだけの力があれば、それでいいんだ」

別に騎士の家系に生まれたわけでもなく、武勲ぶくんをたてる必要もな

い。

俺はただの平民の出で、ちょっと喧嘩っ早いだけのただの男で、剣とてきちんと誰かに習ったわけでもない。下手に良い剣など手にしても、自惚うっぼれて自滅するのは目に見えている。

「良い剣が無くとも、俺が腕をあげれば良いだけの話だからな。まあ、気長に頑張るぞ」

「……………」

反論されるかと思っただが、メディアは何も言い返しては来なかった。

あまりにも俺の返答がありきたりすぎて、しらけたのかも知れないと思っただが、そうではないようだ。何が嬉しいのか、メディアはうつすらと微笑んでいた。驚いたように俺が見ていることに気がつくくと、慌ててそっぽを向いてしまったが。

メディアは立ち上がって、ぱたぱたと裾すそを叩いてスカートのを伸ばし、空を見上げてぼそりと呟いた。

「皆が皆……………貴方のように思っているならば、不幸など起こらないのです」

「なんのことだ？」

その消え入るような声はとても哀しげで……………。

なんでもないとメディアは言ったが、その時の俺にはとてもそうは思えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7056z/>

ARMS MAKER'S 刃の姫

2011年12月24日06時45分発行